



おちほ

第 7 号
1981年7月1日発行
社会福祉法人 椎の木会
落穂寮
発行者 増田正司

寮 歌 の 心

落穂寮長 増田正司

寮歌

- 一、 広い島のあちこちに
一つ二つと落ちてます
こぼれて落ちた 落穂です
- 二、 広い島のあちこちに
一つ二つと拾います
土にまみれた 落穂です
- 三、 広い島のかたすみで
一つ二つと払います
きれいになった 落穂です
- 四、 広い島のかたすみ
一つ二つと芽生えます
生命をもった 落穂です

落穂寮の誕生を祝って、「忘れられた子ら」、「手をつなぐ子ら」、「茗荷村見聞記」等の名著の原作者田村一二先生が、落穂寮の子どもたちにプレゼントしてくださった寮歌です。近江学園の重度クラス「さくら組」が、近江学園という母屋から分離独立して、生涯の住み家「落穂寮」の生活に移っていったのです。戦後の混乱がまだ続いて、社会情勢が不安定な昭和二十五年五月一日のことでした。

どうしたら、重い子どもたちの教育ができるだろうか。この子どもたちの生涯の幸せを、どうしたら作れるだろうか。近江学園の中では、全職員が真剣になってその問題にとり

くんでたかかっていました。その到達した結論が、重い子どもたちの施設を作ろうということでした。

昭和二十五年の頃、田村先生の「忘れられた子ら」の映画が各地で上映されていました。子どもたちを連れて歩行訓練をしていると、通りすがりの人たちの中から「忘れられた子らが行くよ」と言われたりしました。しかし、この子どもたちの問題は社会に浮び上ってきいていませんでした。そんな折の田村先生の著書や映画がどれだけ社会を啓蒙したか測りしれません。

その社会の片隅にも登場しないで教育の機会も与えられないでいる状態を、寮歌の(一)は歌っています。

糸賀先生は、人生や宗教に深遠な哲学と信仰をもたれ、それを根本に置いた独特の教育観をうちたてられたと思います。近江学園の中では、汗を流し、手にまめを作って労働することが賞ばれました。働く人の心は平和で、愛があることを教えられたからでしょう。

フランスの田園画家、ミレーの描く「落穂拾い」という絵があります。一粒の麦が地に落ちて、何千何万の生命が芽生えていきます。大地に生命を啼くむ仕事は、教育という人を育てることに似て、働きと祈りと喜

びに満たされて、生命あるものを生命あらしめることになりました。

落穂寮の子どもたちを育てる仕事は、地味で根気のいる、息の長い精進がいります。糸賀先生は、その心を「一隅を照す」ものと説かれ、又この子どもたちの心の中に、すばらしい人間性がかくされていることを知って、「この子らを世の光に」と説かれました。

重い子どもたちを愛して止まない教育の実践から落穂寮は誕生し、愛と働く教育が始まり、人間の幸せや人類の平和を目指して生活が始まったと考えたいのです。

この仕事は、人間の心の根本に喜びと悲しみを分か合うものがなければ、やっていけないと思うのです。落穂寮という名前は、子どもたちの愛と祈りから、糸賀先生がつけられたのでしよう。その初心に根差して、ささやかな出発をしてから、もう三十年も経ったわけです。

どうしたら、重い子どもたちの教育ができるだろうか。子どもたちの生涯の幸せはどのようにしたら作れるだろうかと作られた落穂寮ですが、未だにその答えが出せないんです。

*

新しい勤務体制から想うこと

池谷正晴

「ほうー／＼ きょう日、まだそ

んな勤務をとっておられるんですか：、求人に行く先々でそう言われてね：、」と職員朝礼時での寮長の報告。年々歳々、保母コー

スを習得する学生は増加して、施設での実習依頼も困る程に増え続けているのに反して、施設への勤務を希望する学生は減ってきている昨今です。当寮始まって以来だ

ほ
ち
お

と思えますが、多数の保母が退職するのを急遽補充しなければならなくなりました。このことは特に民間施設では大変なことなのです。働く事が罪悪のように思われて行く世相では、求職者にとっては、

又現在働いている者にとっても勤務時間が一番の問題とされるので当寮の勤務体制（時間）を検討してみることになりました。

まず、子どもたちの一日の生活の流れをみて、特に手厚くこまやかな指導の必要な時間帯は一日の始まりである朝の時間です。注意深く子どもたちの気分や体の具合を観る事と、体操・朝食・排便・登校準備等、あわただしい時間で

もあります。昼の食事時間も、朝夕と同じように子どもにとっては楽しみな時間でしょう。又、夕方には、学校や作業を終って帰ってきた子どもたちを暖かく迎え、生活指導を充実させる時間でもあるから、という事になって三つの時間帯となります。又、担任保母としては、朝起きた時の子ども顔をみて、「おはよう」と声をかけ

寝る時は「おやすみなさい」と挨拶しなければ気持ちが落着かないし、勤務の日は、できるだけ子どもに寄り添ってやりたいという強い希望もあって、起床六時三十分から就寝の八時迄の間の断続勤務の状態となっていたのですが、これでは一日中拘束されているようで現状にそぐわないらしい。原則的には一日八時間、一週間四十四時間の勤務時間をとっており、保母の希望もあって、半日（四時間）勤務等はやめる結果として休暇は隔週二日制となりこれは他の施設に先がけての勤務体制となっているらしく、新旧混り合った奇妙な体制をとってきた事になります。それらが施設で生活している子どもたちのことを考えた上で良いとしてきたものであっても、世間からみれば施設は特別な環境のものであってはならないと言

い、法に基づいた状態での勤務がなされるようにという事から、この際世間一般とできるだけ同じものになるように努力していく事になりました。と。いって当寮が注目に値するよう

な勤務体制を生みだしたわけではない、どの施設もすでに実施している交代制勤務なのです。でも当寮にとっては大変革なのですが、昭和二十五年の開寮当時から、有名な近江学園三原則の一つであった二十四時間勤務の流れを汲んで歩み出してから今日に至る迄の三十年間の歴史があり、その上につ

ちかわれた伝統があるので、おいそれとはいかないのです。さて、単に勤務体制（時間）を変えればそれだけではすまなくなるもので、指導体制から、それに伴う勤務の効率化と指導の合理化：：等、生活全般に問題がおこり、いろんな影響を及ぼすようになってきたのです。施設のように集団生活を営む処では、時間が如何に大きなウェイトを占めるかが今更ながら驚かされました。勤務時間という大人（職員）側の都合

の良い時間に、子どもの生活のリズムが合わされるようになっていくのではないかとこの職員それぞれ

の想いはあるのですが、実際にお互に八時間だけの動きと触れ合

いしなくなると、思考もだんだんそうなって、すぐに効果のあがるような教育を求めているとすると、いわゆる効率よく、合理的な指導や教育を欲求し合うようになり、それは困った事にはその事は外面からはまことに良いものであるかのようにうけとめられ評価されるのです。

もともと当寮は、もともととして、いっこうに見ばえのよくない姿で泥ん子になり、汗まみれになって、あちこち這いずり廻りながらの生活を共にしてきたと思いません。今年三十一才の壮年になるのですが、今さら田舎者が都会人のように恰好よくなれるものでもなし、田舎者は田舎者として大いに自然に触れ、土に親しみながら素朴な歩みをする寮であり、時間などを超越した子ども達の動きや空間に没入していける寮（施設）でありたいと思えます。

寮生活を始めて思うこと

才藤雅敏

大体僕はこういうところにくるつもりはなかった。どちらかといえば、ひとむかしはやった日本の経済進出とやらに手を貸したという者の一人だった。

「愛」という言葉に、何やら偽善めいた甘ったらしさか、さもなければ、男女の秘事を連想するのが関の山のしがない男だった。

まあ世間という常識的な感覚の持主だったと思う。したがって、僕の幸福感もそこそこ普通のものであったと思う。

お 十八の齡から親許を離れて生活してきたので、自分でやっていたことは、大体何でもやってきたのだが、三十を過ぎた今でもあまり充実感というか、満足感のようなものは何もなかった。

元來人と交わることがあまり好きでなかったの一人でやりたいことをやったところで何というか空しかったのだ。

役所勤めを五年程して、その後たいしてよい職にも恵まれず、ブラブラしていたのだが、その間に

キリスト教の洗礼を受けていた。キリスト教については、いまだにわからないところが多々ある。しかしそれは僕の人生観、人間観を殆ど新しいものに変えてしまった。そうして昨年暮から、落穂寮とかかわり合いができてきた。

最初ここにきた時、外の人は誰しも、偽善という色眼鏡をつけてくるので、わかったようなやさしさを発揮するようだが、私の場合も正にそれで、内心では、ここは神の失敗作のたまり場だと思ったものだ。

しかし、何というか、或る安心感、あたたかさ、そうしたものが感じられた。人を真に生かす何か。それは一体どこから出て来るのだろう。実に繊細な行き届いた思いやり、これを産んでいる源泉はどうもこの子供にあるらしい。また反面この子供には、ある種の頑固さ、憤満のあることに次第次に気付き始めた。仏教用語で

いう人の五欲、即ち、色、声、香味、触、つまり、財産欲、性欲、飲食欲、名誉欲、睡眠欲、これらの欲は人であるなら誰しも感ずるところだと思ふ。

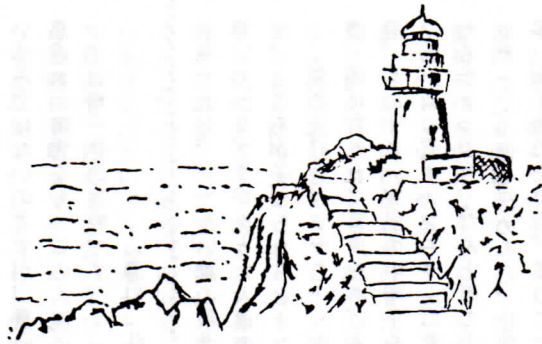
人だ。どうもそこらあたりの理解がこういうところに来てみないとなかなか難しい。いまだって、僕は、そのところをうまく説明できないが、ともかく、精薄児と、世間で烙印を押された子供らは、皆な人なのだ。器質的な障害によつて、発音が抑えられたり、敏しような動作が出来なくとも、皆な人間的な感情を持っている。それも強烈な感情をだ。そこらあたりが次第次にわかりかけてきたというところだと思ふ。

僕自身は、この子供らとの何げないかわりがとても好きだ。ただ一緒にいるだけで、何もしなくてもいいときが一番好きだ。何かこの子供といると安らぎが感じられる。またこの子供は大人の「とが」に対してとても寛容だ。僕もその寛容さに甘える時が多い。しかし知らず知らずに動かされて

いる。施設は、ある面では「先生」と呼ばれる大人の「子供」に対する抑圧の歴史と見られる面がある。子供は寛容だし、だまされやすい。それをいいことに、大人の利己心の伸展にまた大人の思惑に利用することはたやすいだろう。又逆に、真の力が子供から来ている

ことを閑却して己れを誇ることをさへできるだろう。僕はそうした考え方は一切空しいと思う。最後に印象に残る小泉八雲の言葉を引用したい。

仏陀や菩薩がこの世で数かぎりなく違った姿となつて現われることを忘れてはならぬ。人々を真実の道に導いて、迷妄の危険から救うために役立つ場合には、仏の慈悲の目的のために、どんなに下等な賤しむべき姿でも選ぶものである。



「琵琶湖周歩」記から

(下)

春季を終えて

計画までにはいろいろな矛盾が露呈しました。健康こそ、という願いの反面、日課内容の無理がたたって西井孝子さんを入院にまで追いこんでしまったことは、何とも申し訳なく特に胸を痛めました。

ほ

しかし、そんないろんな誤りをそれとはなしに指摘され計画全体を最後まで見守り、かつ応援してくれた皆さんに感謝しています。

ち

結果的には、春季、秋季に分けたこと、それに春季実践を式典後十日間に延期したこと等々がことごとくあたり、春季計画成功への大きな要因となりました。

計画へ向けて準備が進めば進むほど、その視野は狭くなり、まわりのいろんな状況を考慮できなくなるのが凡人の常、先輩、上司のアドバイスを決して無視してはいけないことを悟りました。

そして何よりも、黙々と計画の春季日程を歩ききった子供達の頑張りには驚いています。

春季報告

大人も子供も、期間中はさして大きな疲労も感じませんでした。帰った次の日ぐらいいからにわかはその影響がでてきました。

中村孝司君の歯痛、前川さんの食欲不振、他も全体に疲れがひどく、その後の約五日間ぐらいいは歩行もなんとなく元気がなく心配でした。そう思うと本番の緊張感の中であれほどよく食べ、よく寝てよく歩いたのが信じられないほどでした。

底知れぬ力と、ふだんでは考えられない対応力です。今迄、障害を持っていくからということで、かなり安易に、かつ早急に結論を出してきた我々は大いに反省していかなければならないと思いました。

後半のびわ湖周歩

五月十五日、どしゃぶりの中を海津大崎に到着したのびわ湖周歩の前半。琵琶湖周歩の後半として、十月十三日にもう一度海津大崎観音下からスタートしました。

湖畔でも特に景色のいい湖北から湖東へとびわ湖の東岸を歩きつづけます。一周地点の甲賀郡石部に歩き着くのが十月十七日、前後都合十日間の行程です。

(溝口 弘)



周歩日記

「ドキッドキ」興奮のあまり眠れぬ夜が、一瞬きで大遅刻の朝

エンジン吹かすマイクロボスに飛び乗りやっとな正気に戻り、窓の外をシトシトと降る雨に気付く。その冷たい雨の中、寮生・職員全員の暖かい見送り。睡眠不足の目にも思わず雫が……

秋期出発地点へ向けて寮長の運転するバスは雨中のスタート。がんばって歩いて帰ります。

十月十四日 雨

またまた雨、そして風。なんと

健康な人達に比べれば決して早い歩みではないのですが、重い知恵遅れの障害をもつこの人達にとっては精一杯の挑戦です。

台風十九号。いったい誰の精進が悪いのか？ブチブチと大人の愚痴。ところが子どもたちときたら……風大好きなツヤちゃん御気嫌、雨に打たれて喜声をあげる沢君。ものすごい突風の中帽子をグツツとかぶり直すノンちゃんの堂々たる歩きっぷり、なんと雨の中で悠然と立小便を決めこむ「世界珍事」No.1級の史也君。頭のとっぺんから足の先まで汗と雨でドボドボになりながらも、なぜか愉快指数は一〇〇%のこの一行の旅。

十月十五日 快晴

台風一過、すばらしい秋晴れ。雨で慣らした？二日間、三日目の快晴に少々戸惑い気味。待ちどろしかつた太陽も今はなぜか恨めしい。足どりその他にチョッピリ疲れの色が……

十月十六日 晴時々曇

昨日の疲れの抜け切れないまま八時三〇分出発。何となく重い足どりの午前。しかし、そんな心配も昼食・昼寝までだった。まあ、

皆のよく食べることに、眠ること。今夜はテントで「すき煮パーティー」だ。ハデに食べて、ハデに眠ろう。

十月十七日 曇

最終日だ。しかし最長距離の日でもある。昼食までの長かったこと。寮より届いた「特製真心栗入り赤飯」に思わずホロリ、ここか

秋季を終って

はいやあーやと終った、という実感でした。坂の上で皆が出迎えてくれて拍手がー。歩き切った子供達も何やらびっくりしながら、精一杯のニコニコ顔。同行した職員は気恥しさを隠しながらの真面目顔、でもそれぞれに嬉しさがいっぱいでした。

暑い盛りの事前調査、青息吐息の踏破試歩、子供らもかなりきびしい強化歩行、長距離遠足、それにテントを張れば雨の宿泊訓練、振り返れば大変な苦勞の連続でした。立案者の有無を言わせめ強引さに、子供も大人もよくぞついてきてくれました。

さて秋季の子供らは、やはり夏の疲れが完全に抜けきれいなかったのか、また運動会の練習などかなり拘束された時間が多かった

らは皆得意のコース。寮に近付く

程に無意識の内にヨタヨタながら軽くなる皆の足どり。そして午後四時三十分、坂を登れば四日前と同じ暖かい笑顔がそこにあつた。「ただいま！」

(西郷里美)

せいか春季以上に大変な東岸の歩行でした。

それに宿泊の方も計画書に書いたように、意識的にかなり厳しい条件で進めたこともあって、そのことも子供らの疲れに拍車をかけました。特に第四日目の午後からは、全員がダウン寸前、最終日はどうなることやらと大いに不安でありましたが、皮肉にもテントでの快適な宿泊ですっかり回復し、全行程を歩き通すことができました。

空模様ものっけからの雨、そして台風十九号と悪条件での湖北の路でありましたが、第三日目はまさに台風一過すばらしい秋晴れのもと、うすく淡い青の湖を一日中眺めながらの歩行となりました。残る二日間も何とか天気ももって無事全員元気で帰ることが出来ま

最後に

とにかく無事に終えることができました。いろんな意味で計画全体が成功だったかどうかは別にしても、一周約二〇五kmを歩き切った子供らの頑張りには相当なもので、あらためて彼らの強靱さに驚いています。

障害を持っている、特に重い知恵おくれということとさら色めがねでみていた我々の愚かさを思い知らされました。共にくらししているなんて言いながら、身近かな故に先人観がきつく彼らの本当の人となりを理解できない日常が反省させられます。

それとは逆にこの子らの生れた湖国の地をーと締め出された地域や、切り離れた人達を皮肉ったつもりが、はからんやそうばかりではなく、各宿舍の人達の親切や、古保利小学校の人達の激励、琵琶町役場の人達の御好意や浴道のおばあちゃんの声援はこれまた予想外で、我々の地域に対する逆の偏見、思いすごしを知らされました。

春季はちょっぴり嫌な思いもありましたが、秋季東岸ではいっぺ

んもそんなことはなく、うれしい道中でありました。とにかく施設の側からもより積極的な、そしてかつ具体的な行動をもって、地域の人達との交流、接触を押し込らねばと考えさせられました。

そして繰り返しになりますが、この大胆無謀な周歩計画を支持・指導してくれた寮長をはじめ、細部にわたるまで協力を惜しまなかった職場の皆に感謝します。特に本番中は本隊の方の盛り上がりは当然としても残留の寮の方も充実にしたのと、言葉だけでなくこれは必然的に本当の助けあい、支えあいがなされたことは、周歩そのものの無事終了と同じくらいしく思いました。

この周歩は、落穂寮の健康(生活)教育のほんの一つの節目。これからも今迄とかわらず元氣満々に毎日をすごしていきたいものです。

(溝口 弘)



素晴らしい思い出

古山 民子

カセットテープから飛び出る音楽に合わせて、子どもたちが、歌ったり、くるくる回ったり、はねたり、笑ったり、……。最終日の屋食後のホールは、たいへんな熱気でした。(少なくとも、私にはそう感じられました。)「生きてるんだなあ」という思いが、ずんと胸いっぱいになり、洗濯物をたたみながら、意志に反して、涙はポロポロこぼれていました。

初日は、まごつくばかりで実習生というよりも、お客様のだったのではないのでしょうか。言葉使いからして、今から思うと、気持ち悪いほど、よそよそしいものであったように思います。それが、日がたつにつれ、時には「コラッ」などと、大声の出てる我が姿は、少々恥ずかしくも、嬉しいものでした。

子ども達の目は、正直ですね。不愉快な時は、そっぽを向くか、あるいは厳しい目で、私を見つめていました。逆にたいへん機嫌のよいときの目は、何ともいえず柔和で救われる思いでした。それぞ

れに個性があり、表情があり、心算もない純粹なものだけに、はたとさせられるばかりでした。

何も知らない人、また、何も知ろうとしない人たちは、子どもたちを見ただけで、その内面のすばらしさをのぞこうともせずに、好き勝手なことをいうことでしょう。(もしかしたら、今、こう言っている私自身も、落穂の子どもたちと接していなかったら……とも思います。)ですが、今は、それが

実習を終わって

大垣女子短期大学実習生の感想

どんなに愚かしいことか、よくわかりません。

子どもたちは、いつまでも、汚れない子どもそのままの心を持ち続けて、育っていくのでしょうか。うらやましい気もします。それが、たまたま、現在ある「社会」という中に適応できないだけあって、他には、何の違いもありません。同じ人間です。

今回の実習で、人間観が大きく変わったようです。嬉しい変化です。子どもたちのあのいきいきとした表情が、忘れられません。そ

して、先生方の大きな愛情。「実習に行っただった？」と聞かれたとき、まず、言葉として出るのが「素晴らしい」ということです。人が人として生きている姿に感動しない人はないと信じます。七日間、本当に有難うございました。是非、また、子どもたちに行きたいと思っています。

みじみ思う。実習を始めての数日間、慣れるまでは、どこまで介助してよいか迷った。首をしめる、腕をねじる、下着をひっぱるなど、独特の行動をする子どもに驚き、どのように交っていけばよいのか、心細かった。

この子らに

触れて

大橋 倫子

糸賀一雄の、「この子らを世の光

に」を読んで、実習地は近江学園か落穂寮に決めていた。近江学園の方は規模が大きい感じがしたので小さい方がいいと思った。また落穂寮の方が、より重度であるというところ。希望者が多く、滋賀県出身の学生から遠慮して欲しいと言われたが、どうしても、希望した。落穂寮を選んでよかったとし

た。最初の戸惑いはなくなり、みんなうちの子という気がしてきた。しかし、平均的に接したのではなく、ふりかえてみると、印象の強い子と弱い子がある。

たとえば田川君。ターちゃんはやる気のある子である。三井寺へ行った時のこと、すり鉢状の底からよじ登ろうとする。何回やってもあきらめない。みんなが先へ行ったので、行こうと言ってひっぱら、怒って私をなぐった。とうとうそこへ来ていた子どもも応援して、ターちゃんは登った。彼は、

体中で喜んだ。うれしかった。待って見守ることの大切さを学んだ。保母の仕事量は決して、きついものではない。しかし、長い間には、迷いは生じたり、子どもの姿に励まされて、意欲的になったりするだろう。結婚その他で辞めても、ここにいた人は、財産として、人間が生きていくことは、と考えていくだろう。

ほ 重度の子は、見込みのないものと思われていた時代、糸賀一雄は、「どんな子どもでも、それなりによりよい姿になっていくものである。よそ目にはそれと見えなくても、この子たちの心の中には、少しずつよくなるうとする気もちが芽ばえている。」と言っている。以前はわからなかったが、今の私には信じる事ができる。

お この子どもたちを理解するためには、障害者に直接ふれなければならぬ。私たちのように生活を共にすれば意識が変るのではないだろうか。ただ隔離するのではなく、地域社会とつながっていて、子どもたちを生かすこと。健常児のクラスに、一人、障害者が入ってくる事によって、クラスの雰囲気は良くなった学校がある。いろんな子が生きているんだーと

い...ことを肌で知らなくてはならない。いつも接していないと忘れ去られていく。でも、現状では、ここにいた方が幸せである。これから地域の受け入れ体制を作って

お別れに 際しまして

田中富美

昭和四十七年の四月、本寮に就職いたしましたから、何時の間にか、九年の年月が経っております。三年程、ご厄介になれたら、と思っておりましたのに、その三倍もの年月を過ごさしてもらった事を、今更の様に驚いております。この長い間、外来者をあたたかく遇して下さいました寮長先生始め諸先生方に厚く御礼申し上げます。本当に有難うございました。

炊事場からは、ほとんど出ることもなく、子供達とも直接かかり合う事を、遠慮しつつ過しました九年間、それは、これでよしとした私の一人合点であったと、今更反省しております。これも昔気質の一徹がなさしめたものではなかったかと、しみじみ年はとりたくないものと思えました。どうかお許し下さいませ。

いかなくなくてはならないと誓う。

何もできなかったのに、一生懸命、手まねで話しかけてくれた野瀬君、吉田君、ターちゃんありが

一本の苗木であった桜の並木も、お花見が出来る迄に成長しました。自然生の土手の松の木、桐の木は見上げる位に大きくなって、五月には紫の花を咲かせています。

子供達も皆、大きくなりました。「忠平、おいで」といいながらカウンター越しに抱き上げてもらっていた吉田君、考えてみれば、現在の細木けんちゃん位の背恰好だったように思います。

年毎に春の声がかかると、寮全体の何もかも一廻りづつ大きくなっていくようです。去るに当たりまして、落穂寮の御繁栄、御発展を信じつつ、諸先生方の御健康と御幸福をお祈り申し上げます。

本当に有難うございました。重ねてお礼申しあげます。

阿星嶺の 上空高く 飛行機雲
白くよぎれる 別れ近き朝

とう、足や背中をかいてくれと言ったマーちゃん、かわいいトシくん、弘くんのおでこは？、健ちゃん、物を投げていますか？木村君とお母さん、ありがとう。



自己紹介



ニューフェイスコーナー



高松千代

落穂寮で働き始めてもう二カ月が過ぎてしまいました。なんだか全速力で通りましたという感じが、初めて落穂寮にきたのが今年の一月の末のあるさむい日で、「すごいなかな」「さむすぎる」と思いつつも実習してみようと決心して帰ったのを覚えています。実習はというと運悪くマラソン大会の日とばかり重なり、しつかり走りされました。こりゃあ体力のいる所だなあと不安になり、反面これだけ運

動したらやせるだろうという期待から就職することにしたのに二カ月過ぎてみて、期待してたことにびっくり、がくっとしています。こんな事書くとなんて不マジメな新人だろうと感じられてると思います。本人は思っている（だ）と本人は思っている（だ）と。強性、ひっこみ思案、陰険、楽て家、計画性がない、明朗、さわきたがり、日によって気長になたり短気になったり：と支離滅列な性格の人間ですが、これからもよろしくおねがいします。

大橋敏美

すがすがしい初夏の季節を前に私の落穂寮での生活も、早二カ月が過ぎようとしています。その間には、新人研修会、子供たちの春季短期帰省、又いろいろな行事があったりして、目を廻すような事ばかりでしたが、近頃はどうかやら勤務にも慣れ、日々、楽しく働いています。私は、学生時代、地元JRC活動に参加し、月二回、障害を持つ子供たちと一緒に遊んだり、ハイキングに出かけたり、又老人ホームを慰問するなど、行ってきま

吉瀬恵美

「おねえさん おねえさん」とある子が呼んでいる。勿論私に向かつてである。まだまだ先生と呼ぶには頼りないのであるが、果たして、いつになったら先生と呼んでくれるのか。私の頼りなさはひどい神経質な性分からくるものだと思われる。部屋のドアの鍵をしめても、ふと「かけたかな？」と何度も確かめたくなるし、寮で使っている高価格の洗濯機も、すべてやってくれると思っても、じつと終るまで前に立ってみていない。この活動に参加する前は、口では、「みんな同じ人間で、同じように生きる権利をもっているんだ。」といっても、やはり、どこかで、差別意識を抱いていたように思います。けれども参加するうちに、障害を持つ人々もこんな事ができるのだなと思ひ、見方も変わっていきました。

村井善子

この活動や、落穂寮での今日までの生活も重ねて、障害を持つ人と共に生きるという事は、難しい事だと思ひますが、一緒に生活し、共感しながら、自分なりに頑張っていきたいと思ひます。私の家は農家で、少ないながらも主に温州みかんで生計をたてています。三人兄弟の真中で兄と妹がいます。小学校低学年前後の時期に近所の三家族の兄弟の集り、九人で山や海、近くの荒地で遊んだことが本当に楽しかった思い出として心に残っています。中学校では、バレーボール部に入部。練習はえらかったけれど、友達といふことに喜びを感じていました。

高等学校へは、私自身何の目的も持たず入学し、吹奏楽部に入部しました。

短大へは、高校でクラブばかりやっていたので、勉強しようと思いい行かせてもらうことにしました。ここで寮生活をして、友達関係ということ、考えさせられました。こういう経過があり、落穂寮にきました。動機としては、施設で働きたいと思っていたこと、家に帰りたくないという気持ちがありました。

今思っていることは、何かをしたい、又福祉について学んでいきたいということ、です。

嶋崎晶子

お 初めまして熊本県出身の嶋崎です。ずいぶん遠い所からきたと皆なから言われます。私自身もそう思うのです。たまたま短大が大垣だったので、そのまま近くの滋賀県の方に就職したというわけです。といったら嘘になりますが、いろいろ考えたうえでようやく滋賀県の落穂寮の施設に就職できました。勤めて早や二カ月になります。四月の初めの頃は、何もかもやること事態が始めての事ばかりでとまどうばかり、失敗のくり返しで

自信をなくすこともよくありました。ある時には、男の子から顔面パンチを受け思わず泣いてしまったこともありです。

最近、どうにか慣れてきたせいにか子供達に対して、いたずらをしたり言う事を聞かなかつたりすると叩いてしまうことがよくあります。いくらうるさくいってても、子供は私を慕って近づいてきてくれます。本当にうれしいです。これから先、どこまで自分の力が出るかやれるところまで、いろいろやりたいと思っています。

湯浅美佐子

私が、はじめて精神薄弱児に接したのは、一年前の施設実習の時に、その施設もことごと重度精神薄弱児施設で、そこで実習したことによって私の障害児に対する見方、考え方が大きく変わったのです。だから今私は、落穂寮にいるのだと思います。なぜ落穂寮を選んだのかと言われても、たまたま落穂寮があったと言えはそれだけです。次第に落穂寮での生活に子ども達とけこんでいく中で、落穂寮にくることができてよかったです。と思っています。

でも、元気なところだけが取柄と行ったことぐらいます。運動することはやや苦手ですが、歩いたり走ったりするのは嫌いでありません。落穂にきて、自分の運動神経の弱さとか鈍さに思い知らされました。趣味など何か見つけていければと思っています。今はできるだけのことを精一杯やってみたいと思っています。

中嶋絹代

子供を叱る声、子供を呼ぶ声等で、ざわざわしているのに、夜になるとひとが居るか居ないか、部屋に帰っても、静まり返っている。しかし、落穂内にもひとつだけ、朝昼夜そして真夜中でも、うるさいものがいた。それはあの人とか鳥である。あの鳥、本当は可愛相なんです。自由になり誰かの所へ行きたいのかも、その時、落穂の子供が浮んだ。

菅田栄利子

「アー 何をかこうか」とひとりで吹き机の上に向ったが何一つ頭の中から浮び上ってこない。私は髪を洗ったら気分がすぐれ何か出てくるのではないかと思ひ、お風呂に入った。いつもは二回しか髪を洗わないのであるが今日は特別と思ひ数回は、洗おうかなと思つたのである。私自身のけち精神が出て「もったいないやめよ。」と思ひいつもより一回多く三回洗い湯船に首までどっぷりつかった。髪も洗たし何か浮んでくるかなと思ひずつとつかっていたのである。気が悪くなったので上ることにした。部屋に帰るのに百米もない距離なのに、ひとの声が全然しない。電気は付けているのに、日中は子供の大きな声、先生が子

高校生の頃から施設保母になろうと思ひ始めました。別にこれという理由もなしに施設保母になりたいなあーという感じでした。短大に入り二回生の時に実習に行った所が精神薄弱(者)の施設で始めは子供達に接するのに、なんだか恐かつたのですが、実習先の職員の方に「少しでも精神薄弱の子を正しく理解して行ってほしい」と言われて、ハッと思ひ、精神薄弱の子を知るチャンスをはがしてはならない、そのためには子供達に自分から積極的に接していかなければならないんだ、と思ひ直し自分なりに一生懸命実習しました。実習が終る頃には子供達ひとりひとりがよくなつてくれ、自分が思つて

いた精薄児とは違い子供ひとりひとりが個性を持っていました。この精薄の子供達に私でも何かできることはないだろうか、と思うようになり、精薄児(者)の施設保母になろうと思ひ、精薄児(者)に今後も接していきたいと思ひました。

現在二カ月間保母としてやってきましたが、何ひとつ自分が思ったように行動ができていないのです。すがあせらず頑張ろうと思ひます。

杉田千明

私は、この原稿用紙をいただいた時、一体何を書けばいいのだろうと悩んだのです。つまり、自己紹介といつても特に特技や趣味があるわけでもないからです。ですから、この道へ入った動機を少し書いてみようと思ひます。

私は、短大に入り『障害児研究クラブ』と言うちよつと難しそ



出身は、米どころ新潟。家も農

諸橋敏美

なクラブの一員となりました。活動内容は、障害をもつ子どもたちと一緒に、いろいろな行事(ハイキング、運動会、クリスマスなど)を通して接することでした。そして、私は夏のキャンプで一人のある精神薄弱の少女に出会ったのでした。キャンプでは、みんな泳いだり、キャンプファイアーをしたり、花火大会をして、あつという間に日は過ぎてしまいました。とうとう別れる時がきたとたん、彼女は「また今度きてくださいよ」と、顔いっぱい涙を浮べたのでした。私は、その彼女の顔を見た時、ずつとこの子どもたちと一緒に生活したいと思つたのでした。そして今、この落穂寮に来て思うことは、毎日の生活を子どもにとつても私にとつても充実したものでありたいと健うことです。

業を営んでおり、みわたす限り田と山のみ農村地です。特別変わった事なく小・中学校時代を過し、高校・大学は、働ながら学んだのですがただただ、あわただしく過ぎ去つた気がして、どれだけの物が身についているかは疑問です。在学時代は、何の為に学校に行くのか、など、たわいないことを真剣に考えたものです。そんなある日、本屋で『学校とは何をする所か』なる本を見つけ、なげなしの金をたたいて買ってしまつたりもしました。一冊の本が人の生き方を支えることもあると言いますが、この一冊の本も私にとつては大切な何かを与えてくれたと思ひます。その中に、天は小石一個、草一本といえども、同じものをつくらなかつたから、個々のものは貴重な価値をもつとありました。何のとりえもない私ではありますが、この世にただ一人の私であるから私なりに生きてみたいと思ひ、この世にただひとりしかいない個々の子ども、その子らしさを大切ににして共に歩んでいきたいと思ひます。



ぞえがき

今年の夏も予報では冷夏になるとか。とはいうものの、木々の間からこぼれる日差しが次第に酷しさを増しております。額にじむ汗を拭い一つ「おちほ」第七号をお届け

します。今年度は寮内の人の移動が激しく、勤続十年の溝口先生は退職、新しい仕事を始めました。椎の木会理事長の顔ぶれも新しくなりました。▼大垣女子短大幼児教育科の実習生、古山さんと大橋さんの感想文を掲載させていただきました。大橋さんは二児のお母さんだそうです。寮の子ども達に触れられて感じられたことも多かつたことでしょう。それに田中富美先生は炊事を担当しておられました。とても見識の深い方で、私達もひとかたならぬ御教示を受け、感謝しております。▼子ども達も少し移動しました。最古参の清水君は藤美寮へ、又養護学校高等部へ進学したのが二名、みどり園、あじさい園へそれぞれ一名ずつ入所しました。そして新しく三名が入寮しました。落穂寮の全員はこれから夏にむかつて頑張っています。

(山下)